

飯山市埋蔵文化財調査報告 第51集

光明寺前遺跡

KOU MYOU JI MAE SITE

1996. 3

飯山市教育委員会

はじめに

- 1 本書は、飯山市大字照里字長峰1825-1番地ほかにおける光明寺前遺跡の調査報告書である。
- 2 調査は、地方改善施設整備事業市道7-317号線改良舗装工事にともない、国庫補助事業を受けて飯山市教育委員会が、平成7年9月5日から9月20日にかけて実施したものである。調査面積は約211㎡である。
- 3 調査体制は以下のとおりである。

団 長	高橋 桂 (飯山市文化財保護審議会会長)
担 当 者	望月 静雄 (市教委事務局)
調 査 員	田村 澁城 (飯山市埋蔵文化財センター調査員) 常盤井智行 (飯山市埋蔵文化財センター調査員) 桃井伊都子 (飯山市埋蔵文化財センター調査員)
作業参加者	土屋久栄・服部敏雄・竹内大五郎・北條辰男・小林経雄・樋山 巖 石沢悦次・高橋喜久治・田中史人
整理作業参加者	藤沢和枝・小川ちか子・小林みさを
事 務 局	飯山市教育委員会同和推進室・生涯学習課
- 4 発掘調査では次の諸氏・機関より協力をいただいた。記して御礼申し上げる。
宗教法人光明寺(田中克己住職)・戸狩区
- 5 本報告書の作成は、高橋桂団長指導のもと桃井・藤沢・田村・望月が行い、市教委生涯学習課社会教育係が編集した。
生涯学習課長 山崎賢太郎 社会教育係長 町井和夫 同係 望月静雄
- 6 本書の作成にあたっては、予算的・時間的な都合により図版等を中心として最小限の記述にとどめた。
- 7 本調査にかかわる遺物・図面等は飯山市埋蔵文化財センターに保管してある。

1 遺跡の位置と経緯

A 遺跡の位置

光明寺前遺跡は、長野県飯山市大字照里字長峰に所在する弥生時代中期を中心とした集落遺跡である。

甲信国境に源を発する千曲川が信濃に残す最後の平が飯山盆地である。飯山盆地を過ぎると千曲川は、峡谷を穿入蛇行しつつ越後へと流れ去る。飯山盆地は東西6km、南北12kmの紡錘形を呈する小盆地である。盆地底にはほぼ中央を南北に走る長峰丘陵により東西に分かれる。丘陵東側はかつての千曲川の氾濫源である常盤平が広がり、西側には狭小ではあるが肥沃な湿地帯である外様平が広がる。そして、この湿地帯を望む長峰丘陵上に弥生・古墳時代を中心とした古代遺跡が濃密に密集している。本遺跡をはじめ柳町・照丘・東長峰・小泉遺跡など学史的にも重要な遺跡群が含まれる。

このうち光明寺前遺跡は、長峰丘陵の北端に位置している。隣接して照丘遺跡があり、実態は同一遺跡と考えられるが、照丘遺跡そのものが広大な面積を有しており、時期的な集落形態からは分離すべき要素も含んでいる。また、学史的にも分離してきた経過があるため、当面別遺跡としておき、もう少し内容が明らかになった時点で検討したいと思う。

光明寺前遺跡の範囲は、現在の光明寺を中心として、北側の湿地帯に面する低地にまで及ぶものと思われる。この低地部分は旧照里小学校遺跡としている。調査する機会をもてなかったが戸狩コミュニティセンターや教員住宅及び市道等の建設に際しても出土したと言われている。



図1 飯山盆地とその周辺の地形区分

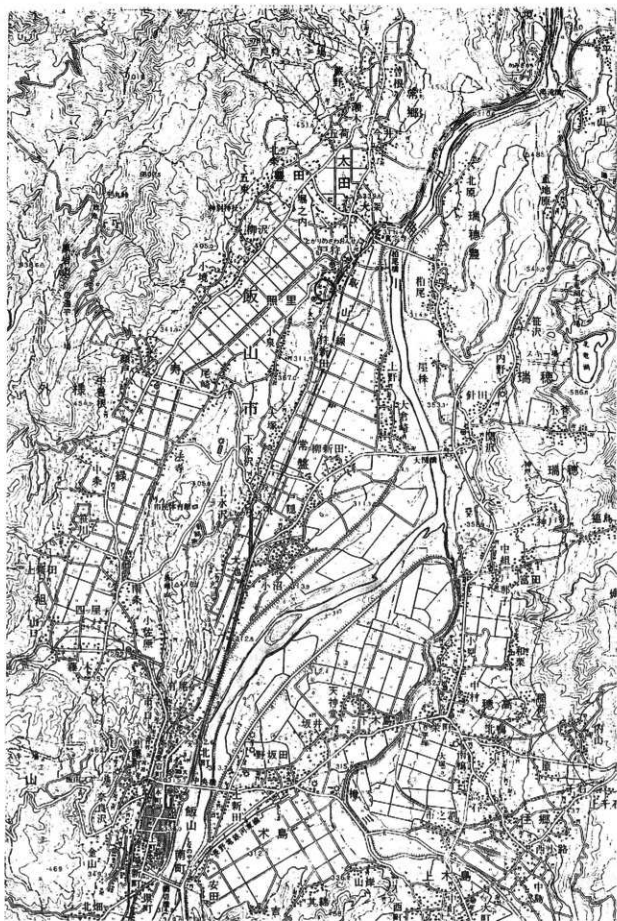


図2 光明寺前遺跡の位置 (1 : 50,000)

B 調査の経緯

(1) 調査に至る経過

平成8年4月、飯山市教育委員会同和推進室より地方改善施設整備事業実施による光明寺前遺跡の保護について照会があった。同室によれば国庫補助事業により市道7-137号改良舗装工事を行うため、一部用地を買収して実施するものであるという。既存道路はすでに遺跡は失われており、その買収する部分のみ調査対象になることが確認された。そのため、5月2日付けで生涯学習課長より同和推進室長宛、文化財保護法第57条による通知の提出と発掘調査に伴う予算確保について要請した。

予算については、6月補正において計上され議会で議決された。57条の提出については7月12日付けで文化庁長官宛提出した。98条の通知についても7月14日付けで提出した。

工事予定は9月とされ、その直前に記録保存のための緊急調査を実施することとしたが、用地買収がはかどらず、結局地権者より発掘調査の同意をいただいて9月4日より現地に入ることができた。

なお、発掘調査に伴う地元説明会は、8月31日夜高橋桂調査団長および常盤井調査員が出席して、区ならびに地権者に協力を依頼した。

(2) 調査の経過（調査日誌抄）

平成7年

9月4日(月) 小型バックホーによる表土除去。遺跡略称をKMG95とする。

5日(火) 調査対象地区の南側の高位より、中心杭180.0～MC.7までジョレンにて精査。BC.8近より黒色土中より弥生式土器出土。遺構は確認できない。遺物は中心杭Naにて取り上げる。

6日(水) KW26～KW25(2083-1番地)に着手。KW25において溝址検出。掘り下げ着手。幅杭Na51～49付近で土器多く出土。

7日(木) 溝址完掘。遺物はほとんど出土しない。KW25以南黒色土掘り下げ。

8日(金) H51～49土器集中地点・溝址(SD1)写真撮影。KW25以南完掘。照里8号墳標高335.24mを基準としてレベル設置。光明寺駐車場北、MC4以北発掘開始。

11日(月) MC4以北完掘。南半は黒色土が厚く、北半は攪乱が著しい。光明寺前(K43付近)着手。すでに削平された地区であった。EC8～MC6の東壁土層実測に着手。

- 12日(火) 光明寺前地点完掘写真撮影。調査地区全体平面図1/100にて平板で測量。南北両端のトレンチ土層図作成。調査は完了する。
- 13日(休) バックホー及び人力にて埋め戻しを行う。器材の撤収を行い現地でのすべての作業を完了する。
- ～20日 補遺調査を実施する。

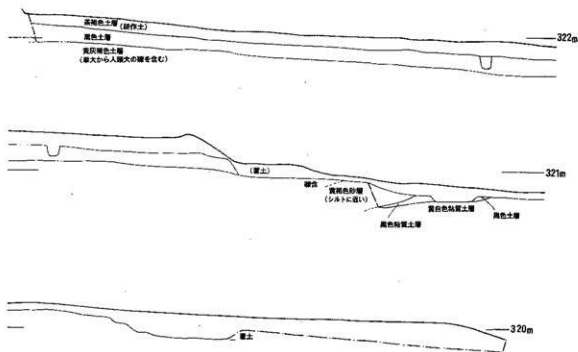


図3 光明寺北調査区西壁土層実測図(南より)(1:80)

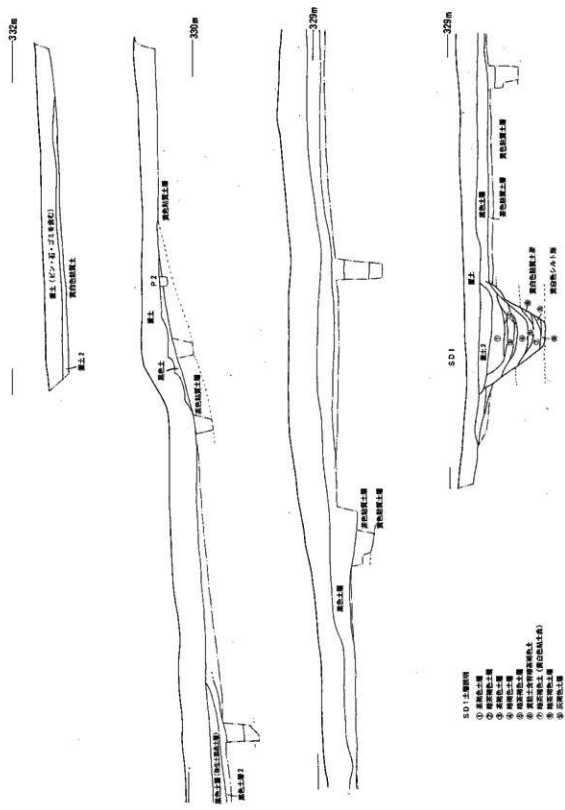


図4 光明寺南隣査区東壁土層実測図 (南より) (1:30)



圖5 光明寺前遺跡と照丘遺跡・梁梁古墳群（1：5,000）

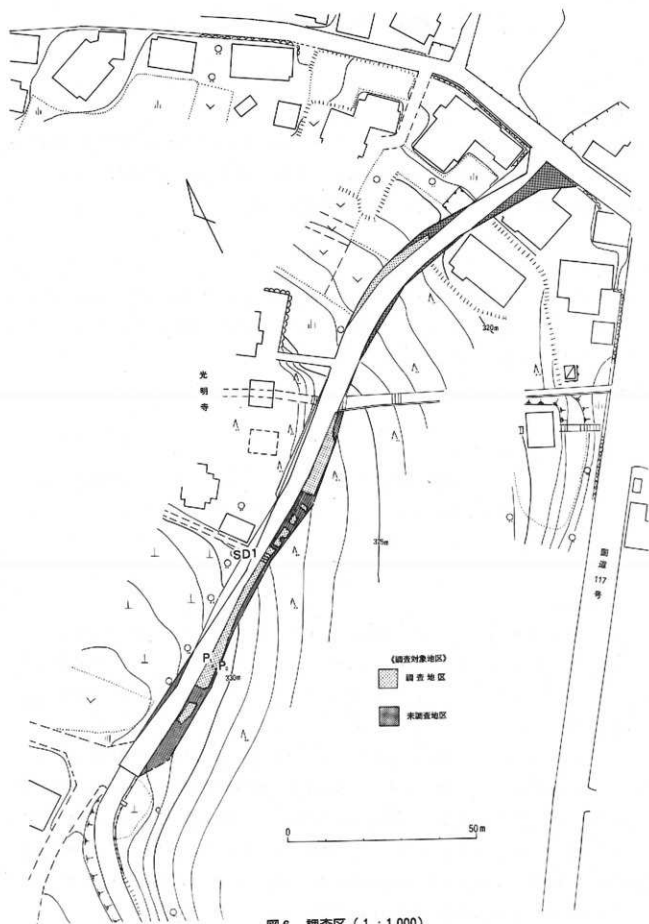


図6 調査区 (1 : 1,000)

2 発見された遺構と遺物

1 遺構

調査によって発見された遺構は、溝址1及びピット2である。道路拡幅部分の狭小な地区の調査にとどまったこともあるが、地形的には丘陵平坦面よりやや離れた斜面であるため遺跡中心部よりはずれた外郭地帯であったためと思われる。以下に概略を説明する。

(1) 溝址 (SD1) (図6)

西及び南側の平坦地より斜面に至る部分において検出。幅約220cmですり鉢状となり、底面は約40cmとせばまっている。深さは確認面より120cmを測る。長さは2m程しか確認できなかったが、斜面に直行して伸びるものと考えられる。

遺物は覆土より弥生中期土器破片が少し出土している。弥生中期の遺構と考えられる。

(2) ピット (P1・P2) (図6)

柱穴かどうか不明であるが、丘陵の頂部に近い地点 (BC8) よりピットが2本検出されている。径30~40cmで、深さは11cm、二本間の距離は中心より1.5mである。遺物の出土はない。

2 遺物

(1) 土器 (図7)

包含層の残されている地区では小破片が比較的多く出土した。特にEC7付近においては接合によって略完形に近い形に復元できたものもある。破片数はコンテナ一箱2箱で、ほとんどが弥生時代中期の土器と識別することができる。本稿では時間的な関係により図上復元可能な固体のみを掲載した。

壺形土器 (1~3)

いずれも細頸壺である。1は頸部から胴部下半にかけてへら描による沈線および波状文の区画がなされ、へら描沈線によって区画された部分には縄文地文及び櫛描直線文が施されている。胴下半部には縄文地文および波状文が分離したと考えられる文様がへら描沈線文帯の上下にネガとポジで施文される。胎土には砂粒を含み焼成は悪い。2は口縁部を欠くが、他はほぼ完形に復元された。胴上部が直線文、下半が重弧文となる太へら描沈線に区画された中に、縄文と磨消縄文が交互にめぐる。

3は口縁部のみであるが、口唇部には縄文が施される。

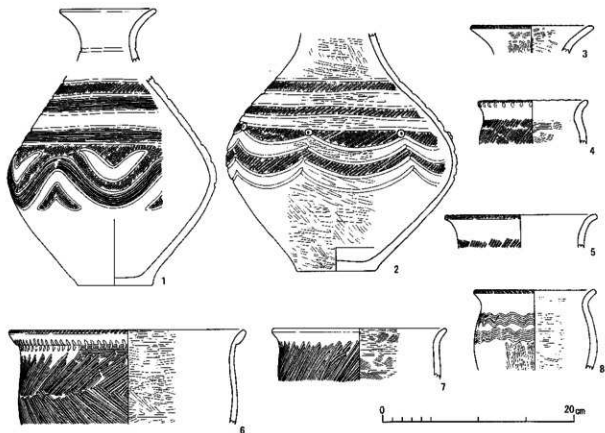


図7 出土土器（1：4）

甕形土器（4～8）

4は頸部がやや括れる小型の甕で、口唇部に縄文を施し、その回りに刻目がめぐる。そのため口縁は波状となる。頸部以下には縄文が施される。5は括れの明確でない器形を呈する。口唇部に縄文を施し、頸部以下には縄文が施文される。6は口縁部が折り返されて肥厚し、そのつなぎ目に刻目が施文される。口唇部には縄文、胴部には横位の櫛描羽状文が施される。7は口縁部が無文となり、胴部には櫛描羽状文が施文される。8は頸部が強く括れる。口唇部には縄文が施文され、胴部上部には櫛描波状文が二条めぐる。

(2) 土製品（図8）

紡錘車 甕の底部にかかる破片を用いている。

直径4.5～4.8cm厚さ5mm、重さ18.5gを測る。

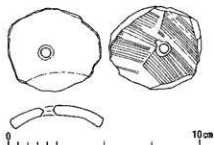


図8 紡錘車（1：2）

(3) 石器 (図9)

安山岩製の剥片が多く出土したが、二次加工の認められるものは図示した5点のみである(1~4・6)。

石鏃 (1・2)

1は先端部をわずかに欠くが、現存長4.5cmを測る大型品である。2は小型品で、推定長3.0cm。両者とも有茎石鏃である。

スクレイパー (3・4)

不定型な剥片の一部に二次加工を施して刃部としたものを一括してスクレイパーとした。3は横長の剥片を素材とし、基部側および先端部の一部を整形加工し、左側縁の鋭い部分を刃部としている。4は、分厚い先端部中ほどを折取り、サイドに両面より加工を施して刃部としている。

剥片 (5)

二次加工は認められないが、比較的整った剥片が多く出土しているので1点図示した。

石槍 (6)

横長剥片を素材とし、端部に先頭状に加工を施したもので、裏面にはわずかな整形を加えただけの半両面加工の石槍である。安山岩製。

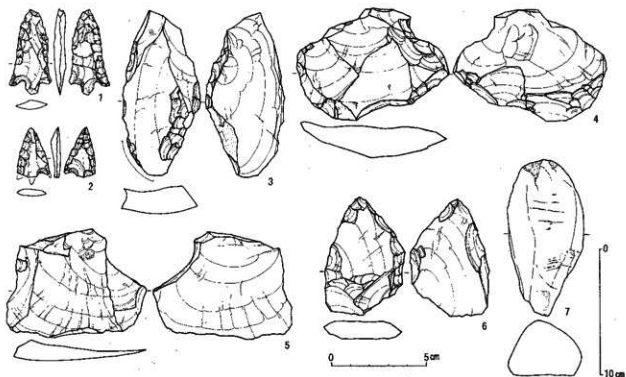


図9 出土石器 (1 : 2)

たたき石（7）

片手で握れる大きさで、断面三角形様のたたき石である。端部が潰れた状態を示し、表面上には線状痕も認められる。

3 ま と め

光明寺前遺跡は古くから知られている遺跡で、信濃考古総覧や信濃史料第1巻地名表をはじめ多くの文献に記載されている。最も古い文献では、明治29年に宮沢甚三郎が「北信地方の石器時代遺跡」のなかで触れている。したがってすでに100年前から知られている遺跡ということになる。また、新しくは高橋桂が照丘遺跡の報告（「飯山市照丘遺跡出土の弥生式遺物について」1962）の中でも若干触れている。

しかしながら、本遺跡の発掘調査はかつて一度も行われたことがなく、光明寺境内において栗林式土器破片や打製石鏃が採集された事実以外、範囲や内容については不明瞭のままであった。

今回、既設道路改良工事によって初めての発掘調査がなされる事となった。調査範囲が限られていた事や多くが破壊されていた場所であったため、遺跡の内容について詳細に明らかにする事はできなかったが、二三について新知見をもたらしてくれた。

まず、遺構については溝址1・ピット2が検出された。ピットについては判然としないが、溝址の発見は今後遺跡の範囲を考える上で大きな課題を提供している。溝は深さ120cm、幅220cmあり、規模からすれば集落境を示すような機能をもった溝であると考えられる。ただし、約2mしか調査できなかった事やどのようにめぐっていくのか推定できなかったため、今後機会があればこの溝の続きを明らかにする必要があるだろう。

遺物については、弥生中期栗林式土器と若干の石器が出土した。ほぼ時期的にも単純であると考えられる。今後は隣接する照丘遺跡の弥生中期集落との関係を明らかにしていく必要があるだろう。その意味でも今回の調査は大きな成果があった。

最後となったが、調査に当たっては地権者をはじめ多くの方々にご協力をいただいた。特に光明寺さんには物心両面からご協力いただいた。心から御礼申し上げる。また、作業に参加された皆さんにも御礼申し上げまとめたい。



光明寺北地区調査前近景



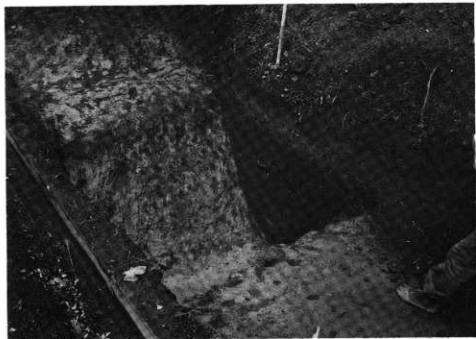
光明寺南地区調査前近景



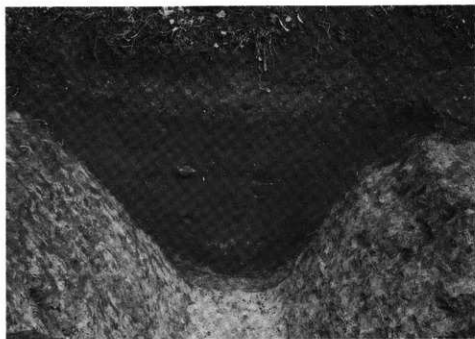
光明寺北地区調査状況



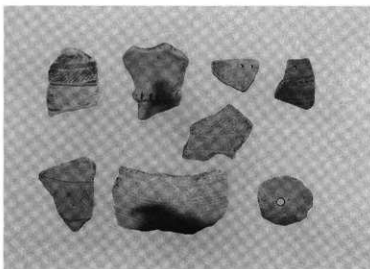
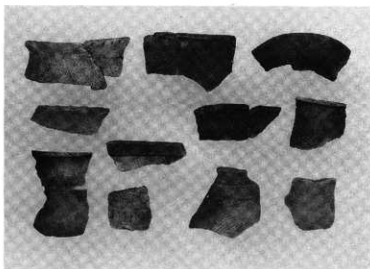
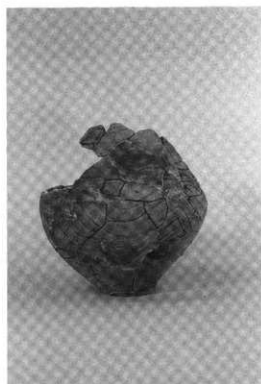
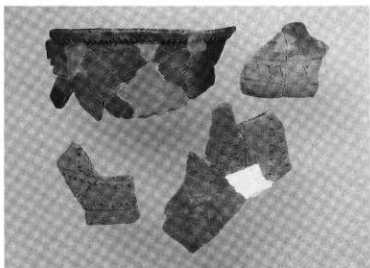
光明寺南地区調査完了写真



SD1 全景



SD1 断面土層



飯山市埋蔵文化財調査報告 第51集

光明寺前遺跡

平成8年3月発行

編集・発行 長野県飯山市教育委員会
長野県飯山市大字飯山1,110-1

印刷 ㈲足立印刷所
